

序

筑波技術大学保健科学部

形井秀一

人の意識やイメージーションはどのような形で存在するのだろうかと考える。

人類が、脳の機能を発達させ、ものごとを記憶できるようになったとき、人類は「もの」に名前を付け、「もの」で世界を形作り、生存していた。しかし、人類が進歩すると、そこに「もの」だけではない「こと」が入り込んでくる。「こと」は言動で、物質ではない。そして、ものを「こと」する形式を人類が作り上げ、そこに一定の意識を固定させて成立するようになったものが「ものごと」に違いない。そのため、事と物は密接な関係にある。モノの名前とそれをコトすることは初期には一体のことだったので、コトとモノが未分化で、両者を意味する言葉が同じ単語であることも少なくない。卑近な例を挙げると、「ハリ」は、モノとしての鍼具を意味するが、同時にコトとしての鍼治療を意味する。「ハリに行つて、太いハリをしてもらった。痛かった。あの先生のハリは下手だ。」さて、それぞれハリの違いは、最初のハリは、「鍼治療」、2番目は「鍼の道具」、そして3番目は「鍼の技術」。でも、全部ハリ。「ハリに行つて、ハリをしてもらった。あの先生のハリは下手だ。」と言える。こうなるとさらに分かり難くなる。

社会学は、言葉により成立している研究分野である。図や表を加えたとしても、それらは言葉が変形したものに過ぎない。そして、社会学は、コトを対象とする学問である、と私は思っている。コトを対象とするから、頭の中だけでひねり回せば何か生まれてくるかと言えば、そうことは単純ではない。コトはモノと密接に関係しているので、コトを追究することはその物理的裏付けとなるモノを前提としなければならない。過去のコトを語ろうとするとき、文献や道具、あるいは、コトを写した絵画や写真などのモノが、少なからず必要となる。

それらのモノを抜きにして、コトを語ろうとすると、自分勝手な解釈やデフォルメした内容に陥りやすい。自分の生きている時代状況から憶測して、過去を勝手に語ってしまうことになる。「今の若い者は、・・・」式の言い回しでは、白けてしまう。従つて、社会学的思考を進めるためには裏付けが必要で、裏付けとなるデータや歴史的事実を土台としてコトを議論しなければならない。さて、そう考える社会学的研究に際しては、まず、その土台となるモノをどのように集めてくるかが問題である。文献や資料が重要となる。

何故この様なことを言うかという、声の大きい人の主張が通つてしまつたり、吟味した主張ではなく、思い込みの声がいつの間にかそのまま正しいことのようにまかり通ることが多々あるからである。乏しい材料で想像して主張するのは止めて、資料の範囲で主張するべきであろう。大事なことは事実に基づく冷静な議論であり、それを踏まえた判断、結論である。主張するに足る資料がなければ、資料を掘り起こすしかない。

さて、考古学の仲間入りをしなければならないほど、鍼灸の分野は古くはないにしても、十分な資料が蓄積されている分野でない。では、どうやって資料を掘り起こすか、誰がそれを意味ある資料として分析するか、誰がその労を多とするとか。1998年に法律が変わり、社会鍼灸学が教育の科目に入ったとはいえ、それは生まれたばかりの新しい分野である。

鍼灸の基礎的・医学的研究は、西洋医学の土台を借りれば可能であった、臨床研究も研究手法を学び、工夫しようとする人は現れてきた。しかし、鍼灸の存在そのものを社会的立場で、客観的に議論、評価することは、必要を強く感じながらそう簡単にはできなかつたし、そのような研究者がなかなか出現しなかつた。そうならば、社会鍼灸を検討しようとするムーブメントを起こすしかないという思いは徐々に強くなり、それを実現しようとする意欲は衰えなかつた。研究会を立ち上げたのはそのような思いからであった。

その時、その考えに賛同し、一緒に社会鍼灸学研究会を立ち上げたのが千葉県立盲学校の教員で、筑波技術大学保健科学部の客員研究員であった箕輪政博氏であった。近代・現代の鍼灸を正しく評価し、歴史の中に位置づけていく必要を感じていた氏は、埋もれていた資料を着々と収集して回った。鍼灸関係の図書館や国会図書館はもちろんだが、各地の公文書館に出向いたのは、ヒットであったと思う。新しい資料が発見され、裏づけられた新事実を踏まえて語るができる部分が徐々に広がりつつある。明治から昭和の初めまで、鍼灸は、欧化していく日本文化の中で一気に衰退の方向へ進んでいったかのように考えられていたが、実は、鍼灸を如何に復活させるかに心を砕いた人々がいたのであり、明治・大正期のそのような志の人々にこの分野は継承されて来たのであった。また、1900年代から第二次世界大戦敗戦までの40年余りの時期は、日本近代史の中では海外を植民地化した負の記憶の時代であったが、日本鍼灸界が、海外へ進出した時代でもあった。

さて、箕輪氏による近代の鍼灸の研究がまとまり、それを論文として発刊することとなった。本論文が、この新たな分野を切り開き発展させる切っ掛けの論文となることを期待する。幸いなことに、社会鍼灸学分野で研究をしようとする若手の研究者達も生まれつつある。新たな書き手が現れ、増刊号が毎年出るようになることを待ち望んでいる。

ところで、箕輪氏の主張したいコトは、集められたモノを十二分に踏まえ、そのモノの範疇を逸脱することなく、しかも十分に論が展開されているだろうか。是非、今後の社会鍼灸学研究の発展のため、また、箕輪氏の研究がさらに深化するように、忌憚ないご意見をお寄せいただき、議論して頂きたい。それこそが社会鍼灸学研究会を立ち上げた意味である。

2010年7月30日

筑波技術大学保健科学部保健学科鍼灸学専攻

つくば市吾妻の寓居にて